

通し番号	5063
------	------

分類番号	R02-9C-32-03
------	--------------

キンメダイの加入状況調査
[要約] キンメダイの卓越年級群の発生を察知することにより、その後の有効利用を図るため、生育場である東京湾口海域で若齢魚の捕獲調査を、2017年から継続して実施した。その結果、本種は加入後数年にわたり東京湾口海域に留まることが明らかにされ、その加入状況の定量化もある程度可能であることなど、資源評価や管理に関する有益な情報が得られた。
神奈川県水産技術センター栽培推進部 連絡先 046-882-2314

[背景・ねらい]

キンメダイは古くから本県漁船漁業の対象として重要な魚種であり、東京湾口海域から伊豆諸島周辺海域でのたて縄釣り、さらに公海を含む沖合海域で操業される底たてはえ縄漁業で漁獲される。本種は天皇海山～本州南岸～小笠原諸島～琉球列島海域という広い分布域を持ち、寿命が長く成長も遅いことや、他の年と比較して卓越的に発生が多い年級群（卓越年級群）によって、その数年後以降の漁獲を支える資源構造上の特徴を持つことが知られている。この卓越年級群の発生を察知するため、若齢魚の発生状況に関する定量的な調査を2017年から継続して実施した。

[成果の内容・特徴]

- 1 東京湾口海域と伊豆諸島周辺海域（島回り）の立縄漁船による操業1回当たりの小型魚（200～400g）の釣獲尾数（CPUE）は、類似した変動傾向を示した。また、この数値は両海域ともに2014～2015年を境に増加に転じたものの、2019年には大幅に減少し、2020年も引続き低い水準であった（図1）。
- 2 2017年以降に東京湾口海域江の島丸による若齢魚の捕獲調査を行った。同調査では、尾叉長16～32cmの小型のキンメダイが得られた。
- 3 2017、2018年には16～19cmの1歳魚、22cm前後の2歳魚が多く、2019年の調査では3歳以上が主体となったものの、2020年には再び1、2歳魚が主体に捕獲された（図2）。調査における捕獲尾数は2017年が578尾で、その後減少し、2020年は52尾と低い水準となった。
- 4 これらのことから、2014～2016年級群の加入量は他の年級群と比べ多く、今後数年にわたり東京湾口から伊豆諸島周辺海域でのキンメダイ資源はこの2014～2016年生まれの年級群が主体の年級構成で推移すると思われる。また、加入後3年間程度は生育場と考えられる東京湾口海域にとどまること、その変動と多寡の定量もある程度可能であることが示唆された。

[成果の活用面・留意点]

- 1 昨年度から、本種の若齢魚の混獲が多くみられる真鶴沖の調査船調査も試験的に開始しており、東京湾口海域での調査と併せて、キンメダイの資源評価からの管理に資する

情報としての加入量把握の精度向上を目指す。

- 2 さらに、ここ数年は千葉県でも東京湾口～外房海域で新規加入量調査を実施しており、情報の共有を図ることで東京湾口や伊豆諸島周辺海域に加入するキンメダイ資源把握の精度向上を目指す。これらのことは、資源評価に基づく漁獲量の管理（TAC制）対象種に移行することが見込まれる本種の具体的な資源管理方策の策定と、その効果の向上に資することが期待される。
- 3 本研究において、東京湾口海域に加入後数年間は留まることが示唆された一方で、数年後には同海域から姿を消している。これが、成長に伴う南下によるものか、漁獲によるものかが明らかになれば、資源を持続的に利用するためにどのような資源管理措置が有効であるかの判断材料となる。

[具体的データ]

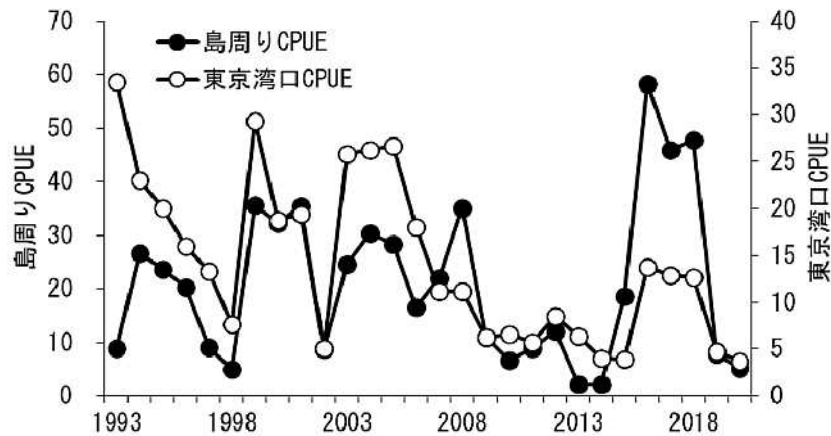


図1 東京湾口および伊豆諸島周辺海域で操業を行うキンメダイ立縄漁船の操業1回あたりの小型魚釣獲尾数（CPUE）

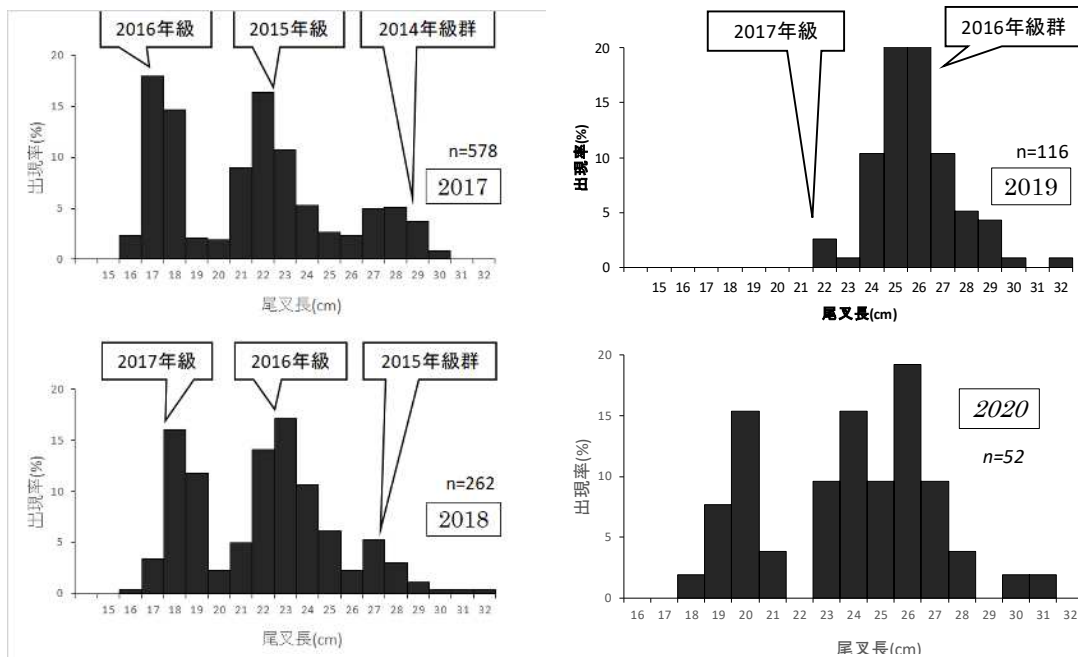


図2 2017～2020年に東京湾口で実施した新規加入量調査で採集されたキンメダイの尾叉長組成

[資料名] 令和2年度神奈川県キンメダイ資源管理実践推進漁業者協議会
令和2年度一都三県キンメダイ資源管理実践推進漁業者協議会資料

[研究課題名] 関東近海におけるキンメダイの資源評価に関する研究

[研究期間] 平成28年度～令和2年度

[研究者担当名] 中川 拓朗、岡部 久